

坪内逍遙

小説三派

小說三派

総評

「新作十二番」とは春陽堂より発兌はつだせる美本の読切物にていづれも名家苦心の小説也。第一番は竹のや主人の「勝鬨かちどぎ」第二番は紅葉山人の「此ぬし」第三番は美妙齋主人の「教師三昧さんまい」第四番即ち最近の発行は三味道人の「桂姫」なり。いづれあやめ草ひきもわづらはれておのおのおろかなるは無けれど、氏うぢも育そだちも流石さすがに殊なるこそをかしけれ。先づ「勝鬨」と「桂姫」とは色も香も大

同にて小異也。然るに此の二つと「此ぬし」とを比ぶれば心も形も大異にて小同なり。さて又「此ぬし」と「教師三昧」とを比ぶれば色も香も大同にて小異也。然るに「教師三昧」と前にいへる二つとは心も形も大異にて小同なり。具つぎにいへば「勝鬨」と「桂姫」とは着想も文章も専もつぱら在来の粹を採れるに、「此ぬし」と「教師三昧」とは新文脈をまじへ用ひて着想も頗すこぶる外国ぶりなり。詳きことは次々にいはん、爰こゝにには便宜のため仮に「勝鬨」と「桂姫」とをもて同類の固有派と名づけ、「此ぬし」と「教師三昧」とを一味の折衷派せつちゆうはと称す。

所謂いはゆる固有派とは、物語を作るに事を主として人を客とし、事柄を先にして人物を後にする者也。人間の浮沈榮枯流離轉變を語るを主として、傍かたはら種々の人物を点綴てんていし、正邪順逆の跡を紙上に躍然たらしむるもの也。此派の物語ははじめより事變を主とすれば、奇異の事をも偶然の事をもさしはさむ。且かつ又必ずしも主人公を設けず、たまたま主人公を設くるも、事（話）の脈絡を繋つながんと為也。蓋けだし大かたの事變は主人公の性行より来たとせで、偶然に外より来たとする故に必ずしも主人公を要せぬなり。夫その固有派の巨擘きよはく曲亭の作を見るに、悪人は暫しばら

く措き忠良の人の上に起れる禍は、大抵天の為せる災に
 してみづから招けるはいと稀なり。其他京伝種彦の作も、
 轉變流離の誘因を偶然に歸したるが多し。例へば里見伏
 姫の不幸も、自意識を標準としていへば自ら致せるには
 あらで、全く其意識の外より来れり。又芳流閣の災難も
 信乃が心の罪にはあらで、はか 凶らず外部より来れるなり。
 即ち事と人の心との間に（災厄と性行との間に）必ずし
 も密接なる関係無し。事を主として人を客とし、事を先
 にして人を後にしたればなり。所詮此派の作者は俗にい
 へる三世因果の説を理法とし、もし 若くは天命の説を理法と

するなり。就なかんづく中曲亭の作はをさをさ三世因果の説によ
 れり。「八丈綺談」「春蝶奇縁」「累解脱」等を見てもし
 るけし。それだにおしなべて小乗の心なりまして、其末
 流に及びては此の理やうやうおぼろげなれば、人心と事
 変との縁ますます遠くなり、動やもすれば宿命説フヘタリズムの趣に似
 たるものあり。草双紙などに見えたる忠臣孝子の災厄は
 間々宿命フヘートの所為とも見えて理無むりし、有う為い轉變諸行常無し
 と解せば解すべし、しからざれば卷を措おきて天道の是非
 を疑はざるを得ず。在来の作者が筆を曲げても毎つねに団円
 をめでたくせしは、一つには此不審を釈とかんが為なりし

ならん。恐らくはおのが心にも安やすんぜざる所ありければなるべし。到底近年の固有派は天命の説を（作者みづからは意識せずもあれ）奉じたりと見て可なり。榮枯福禍を必ずしも人に歸せざればなり。此派は外国にも多かりき。中古の物語類はいふも更なり、スモーレット、フヒールディングの徒頗るよく性情を写せれど、其実は事を先としたる也。スコット、ヂッケンスも亦また間々しか然り。只後者の旨としたる所は、事のみにあらで人にも在り、事を先にすれど事を主とせざる所異なれり。此差別は次の折衷派と共に説くべし。

折衷派とは、人を主として事を客とし、事を先にして人を後にする者也。前の固有派と半はかばは似たれど半は異なり。人を主とするとは人の性情を活写するを主とする謂いひにて、事を先にするは事に縁よりて人の性情を写さんとすれば也。性情は形無きものなれば、有形の事変に縁えらざれば写しがたき故也。具つらやにいへば或る特別の人物を作りて其人の榮枯轉變に於ける心の有様を写すなり。前の固有派にては事主にして人物客たれば、人はおのづから事の附物となりて客観なり。しかるに此派にては人を主とするが故に、人物おのづから主観なり。換へていへ

ば人物の哀歡悲喜を外よりのみは見で内よりも見るなり。英雄の心緒紊みだれて糸の如しと客觀的に叙し去らで、時としては其の乱れたる様を写すこともあり。但ただし人物と事變との間に主客先後の關係こそはあれ、未だ因果の關係なければ人物必ずしも主觀とはならず。蓋けだし此派の本意は或特別なる事變に於ける或特別なる性情の狀態を写すにあれば、未だ必ずしも事變をもて其人に由来すとせざるなり。是別に人を因として事を縁とする派のある所以なり。

新作十二番を評するに斯^かかる管々^{くだ}しき弁何の要かあるといぶかる人もあらんが、評者は此弁の止みがたきを知る也。今の批評家中には、間々第二派の眼をもて第一派を評し、若^{もし}くは第三派の眼をもて第一派を評し、徹頭徹尾取る所無しと抹殺する者あり。かかるはホーマル、ブルジルを評するにソホークリズ、ユーリピヂズの眼をもてし、ミルトン、ダンテを評するにシェークスピアの眼をもてするものに似て少しく理にたがへり。げにや叙^エ事^ポ詩^ス

もドラマも其その詩たるや一つなり。梅も桜も其花たるや一つなり。然れども花に種々の別あるは争ふ可^{べか}らず。桜或は花の王なるべく、梅或は花の兄ならん。さりとして梅は梅桜は桜なり、桜をめづる眼をもて梅を評する人をば、色をも香をもよく知るものといふべきか。烏呼^{をこ}をこの風流雄汝桜の外に花なしと信ぜば、何ぞ先づ桜の梅にまさるを説き、兼ては梅を枯らすべき方^{はかりごと}を講ぜざる。古^{ふり}たる梅園に就きて其花の桜ならざるを笑ふ風流雄の名にも似ではしたなきかな。

西詩に三派あり、抒情詩と叙事詩とドラマとなり。其

中ドラマをもていと高しとすれど、抒情詩も叙事詩もまためでたし。案ずるに小説にもそれに似たる派あるべし。前にいへる固有派は更に名づけて主事派もし若くは物語派ともいふべく、其次の折衷派は又の名を性情派若くは人情派とも称すべし。さて別に第三派を置きて之を人間派と呼ぶべし。即ち人を因として事を縁とする派なり。第一派（即ち物語派）は最いと広き意義にていふ叙事詩の形にて、第三派（即ち人間派）は最狭き意義にていふドラマの結構なり。而して第二派（即ち人情派）は其事を先とすること甚だしければ叙事詩となり、其人を主とすること重

ければドラマの形とならん。常は両派の界に立てり。さて物語派と人間派との別は明かにて、物語派と人情派との相違も已すにいへり、ひとり人情派と人間派との別はなほおぼろげなれば今少しく次にいはん。

人間派とは、其結構をいへば人の性情を因として事變を縁とするものなり。其事變を縁とするは前に人情派（折衷派）に就きていへるに、同じく有形の事變に縁よらざれば人の性を發揮する能あたはざればなり。これまではほとほと人情派と一つなり。さて其異なる所をいへば人情派は或事情に於ける或性情の状態を写せば足れりとし、若もしく

は或事變の或性情に於ける影響を写せば足れりとす。故
 に性情と事變との間に（人と事との間に）主客先後の関
 係はあれど、（前アンテシデント頃、後コンシクエント頃）の關係はあれど）必ず
 しも因果の關係無し。即ち人を物語の主題とはすれども、
 未だ人をもて事の主因とはせぬなり。されば事の起りて
 後にこそ人の心は動け、人の心まづ動きて後に事の生ず
 るにはあらず、此理茲ここに尽しがたし。下に「此ぬし」と
 「教師三昧」とを評するを見て察せよ。我所謂人間派は
 然らず。先づ人を因とし事を縁として一果を写し、此果
 を（若くは他の事變をも合せて）縁として更にまた一果

を画き、終つひに大詰の大破裂若くは大円満に至りて休む。偶然の事変を使ふことは物語派と同じけれども、其事と主人公との間に因縁の關係の離れぬ所たがへり。是もとより眼目の差をいへるのみ、小同は三派相通なるべし。管々くだしくは例をもて証せざれども、シエークスピヤを讀みたる人は評者の言の大に誤らざるを知らん。マクベスの逆心まづ萌きざむして弑逆しいぎやくの事起り、弑逆の事縁となりて彼が罪悪ますます増長せしを想へ。又ハムレットの懷疑固もとより存じて腸九回的煩悶となり、オセロの妬疑一たび萌して血涙千行的慘劇を醸かもせしを想へ。客觀的哀歡は概

して主観的性情より生れたりしを想へ。則ち人心と事變との間に先後の關係ありて、又更に因果の關係あるを見るべし。されば傑作のドラマを読めば吾人恍くわうとして因果の理を見、且かつ雜然紛然たる人寰じんくわんに一定の理法流行することめいごを瞑悟す。而して其理法たるや幽明にまたがり有為無為に涉りわた、虚靈より出でて実相に現はれ実相寂滅してまた虚靈に歸す。例へば「シーザル」のドラマに就きてブルータスを見よ。彼れ思量足らでシーザルを殺し乱を醸し身を殺す、羅馬ローマの内乱といふ実相はブルータスが遠慮あまねの周ひとへからで偏ひとへに靈界にのみ彷徨せし結果とも見る

べし。さすればブルータスのやぶれ敗たるはみづから致せるなり、自業自得なり、天を咎とがめんや人を怨みんや。主觀的ブルータスが客觀的ブルータスを造りいだせしなり。ブルータスの失墜は身招自致なり。然らば吾人のブルータスに対する感想は、只一の惻隱慈悲の心あるのみかといはんに然らず。吾人は客觀的ブルータスを貶すと同時に、主觀的ブルータスを貶すこと能あたはざる由あり。彼れの義と勇とは、吾人遂に貶すこと能はざればなり。彼れ現界に於て敗れたれど、隱然靈界に於て凱歌を歌へるを聴けばなり。吾人が到底ブルータスの義を美とせざるを

得ざることを想へ。則ち此明界の背後に、更に又一の幽界ありて人間の妍醜けんしうを定むることを見るべし。是前に虚より出でて実に現はれ、実滅してまた虚に帰すといへる所以なり。而して此理法は吾人がドラマにて暗に観る所にて、また人間に於て暗に見る所なり。蓋し浮屠ふと氏の謂ふ三世因果の理も、其底を叩かば此理に外ならざるべし。將はた哲学の究めんと欲して未だ明釈する能はざる所も、或は此理に外ならざるべし。現在の人智は只瞶々裡に此ことわりを知れるのみ、未だ明かに釈すること能はず。

三

上の如く解すれば「人間派」は人と事と相いんねん因縁てんめんせるを写すをもて足れりとせで、更に虚実幽明の相纏綿てんめんして離れざる趣を写すものなり。即ち人間の経緯を取りて因果を織おり做なせるものといふべし。されば人間派の写す所は、其形は小なれど其心は大なり、其相は一なれども其実は万なり、其表は特殊にして其裏は普通、其色は偏にして其理は円なり。夫かの人情派の、其形も其心も其相も其実も其表も其裏も其色も其理も大かた特殊なるとは同じか

らず。又夫の物語派の偏に普通なるとも異なれり。案ずるに、物語派は俗に謂ふ因果説を体し、若くは天命の説を奉じて普在せる事相を写すものから、其相の由来をば明にせず。さるが上に、本来人物を主因とせざれば甲人に於ける天命も乙人に於ける天命も汎然漠然として一なるが如く、平等の理はあれど差別の実なし。死したる觀念はあれど活きたる觀念はなく、ゼネラリチーはあれどインヂギヂユアリチは無し。此故に或は読者をして世に因果あることをば知らしむべきが、因果の關係をば知らする能^{あた}はじ。或は読者をして人間に理法あることを知ら

しめんが、其理法の人に因縁せる由をば知らしむる能はじ。先天的にもものして後天的にもものせざればなり。演繹的えんえきてきに筋を立てて、歸納的に筋を立てざればなり。

茲ここに件くだんの三派を物に喩たとへていはん。先づ人に配して

いへば、物語派は支体の如く、人情派は五感の如く、人間派は魂の如し。又之を画に配せば、物語派は文人画の梅の如く、人情派は一枝の梅の密画の如く、人間派は根幹枝花残りなく画ける油画にも似たらん。文人画の梅粗なれども梅の全体を見るべく、密画の梅花細なれど一斑に過ぎず、ひとり油画の梅は其全体を見ると同時に枝、

葉、根、幹、花の相関係せる所以を見るべし。又之を学問に配せば、物語派は常コモン・センス識の如く、人情派は諸科の理学（天文、地質、植物、動物）の如く、人間派は哲学の如し。常識は広くして浅く、科学は狭くして深く、哲学は広くして深し。

併しながら此等の比喩は其質を評せるのみ、必しも三派の優劣をいへるにあらず。然るを若し比喩を進めて、哲学は科学の親なるゆえに人間派は毎つねに人情派に優れり、常識は科学の材たるに過ぎねば物語派は最も下なりといはば、是恐らく非事ひがごとならん。猶風韻ある日本画の

粗なるを見て密なる油画に劣れりといはんが如く、一向に形に泥める沙汰なり。哲学の名は尊しといへども其の説まことに高からずば、まことに深き科学に及ばざること遠し。ダーキーン、ハクスレーの学説をもて謬妄びうまうなる独断哲理に劣れりといふは狂愚なり。さて又物語派を常識に比したるも、只其形の上をいへるのみ。其表に現はるる所のいと広くして浅きをいへるのみ。寸鉄よく人を殺す、俚諺りげんに見えたる常識の大独断教に優ることあるを思へば、普通の常識ばかり真理に近きものはあらざるべし。常識あに豈卑しかるべき。されど世の物語派即ち事を主とし

て物語を作る人々の中には、間々事を重んずるの余りい
 つしか事の奴やつことなりて、我また人物を奴とし奇くしき事
 を語らんとて、有るまじき人物を作る事あり。かかるは
 常識界を離れて詭弁界きべんかいに入り、若もしくは妄言界に踏ふみ込める
 ものともいふべし。文化文政の名家に此失多し。

また案ずるに、我国の純文学の幕の内ともいふべき文
 学並ならびに浄瑠璃の多数も、大かたは物語派也。即ち
 事を主として人物を客とせり。演劇の台帳すら諸派の雑
 種にて中には純然たる物語派なるも多し。今の批評家
 往々我わが狂言作者を責めて、彼等学浅くして識足らず何ぞ

共にドラマを語るに足るべきと叱すれど、是思ふに的まとを誤りたる沙汰ならん。たとひ彼等狂言作者をして大なる学と高き識とをもたしむるも、今の批評家が望める如き西洋風のドラマをば争いかで得作らん。何となれば彼の主とする所と此これの主とする所と全く違へばなり。批評家はドラマを得んと欲し、作者は叙事詩エポスを作らんとす。作者批評家に迫られて進退維これ谷きはまり、銳意奮発して「二口劍」の主人公のやうになりて、千鍊々万鍛々干将かんしやうばくや莫邪まがやを作り得たりとするもまた益なし。批評家侯の所望は、日本刀にあらず正宗にあらず支那劍にもあらず莫邪にもあら

ず、ダマスカスの短劍ダツガルなるをいかにせん。侯の注文理な
 くもあるかな。試に想へ今の文壇誰か学海居士を推して
 博学卓識の文人とせざらん。而も居士の作の曾かつて批評家
 の旨むねに称かなはざるに非ずや。又見よ竹のや主人の近作「太
 田道灌」の脚本を、誰か彼の作を評して学足らず識足ら
 ずといはんや。よし絶対に高くとは云ひがたきも、相對
 には高かるべし。而も此作を批評家に示さば彼れ果して
 何といふやらん。吾人は正に美といはざるべきを予言す。
 是併しかしながら両家の技倆の拙きがゆるゑに然るにはあら
 で、作者と評者との間に旨の異なること甚しければなら

ん。作者は水を望み評者は山を望み、作者は東に向ひ評者は西に向ふ、漸く進みて漸く離れ、漸く巧にして漸く拙なるが如くに見ゆるなり。嗚呼あ西方果して弥陀の浄土か、上しやうにん人何とて其然る所以を説教せざる。

四

台帳の事はさしおく、小説に就きていはんに、西洋にてもドラマの趣旨のをさをさ小説に用ひられしは実に近きころの例ためしなり。前にもいへる如く、スコットは物語

派と人情派との間にまたがりし作者にて、ヂツケンスの如きもまた然り。さてまたサカレーとても重に人情派の作者と見てよかるべし。「ペンデニス」、「ヘンリ・エスモンド」などを見、「ヴニチ・フヘア」などを見るにも、人の主題となれる跡は明かなれど、人の主因となれる証はおぼろげなり。ジョージ・エリオットの諸作は評者の詳しからぬ所なれど、嘗て^{かつ}見つる「ミツドル・マーチ」によりて判ずれば、頗るドラマの旨意に^{かな}称へり。思ふに英国に於けるドラマ的小説家は彼女史ひとりに止めたるにやあらん、知らず女史の外にも尚あるにや。夫の^か近世

の魯獨にこそドラマ的小説家も多しとは聞きいたれ、それもいと近き程の事なり。又仏蘭西フランスなる諸作家バルザック、ユーゴ、ゾラ、ドーデーともがらの徒は或は我所謂人情派の界を越えて、人間派に入れりともいふべからんが、これとてもまた近世の作家なり。詮ずる所ドラマ主義の小説界に入りしは、十九世紀に於ける特相といふも誣言ふげんにあらじ、尚いと稚き現象なり。ウベルネ、ハツガードの徒はいふも更なり。ホルムス、ブレットハート、ベザントの如きものも、我批評家の評言を聴かば恐らく惘然まうぜんと自失すべし。批評家の説の非なるにはあらねど其説の新

しければなり。然るに何事ぞ今の批評家所謂人情派の小説だにいと稀まれにある我小説壇に向ひて、唐突にドラマ（ギョオテの「フハウスト」シエークスピヤの台帳）を標準として物語派の作を批判し叱咤しつた一撃して是小説にあらずと喝破す。嗚呼是文壇の救済主の声か、物語派の名家みづから信ずるに厚く且頑かたくなにて、絶えて改進せんの心なくば事も無けれど、改進せんの心あらば彼等そも何の方角に向ひて進むべきぞ。何故にドラマ主義を奉ずべきか、茫々然として知るに由なく、百花爛漫紅雲蒸すが如き中に立ちて、梅まづ畏おそれて散り桃また次ぎて散り

李^{すもも}も散り^{あんず}杏も散り^{なし}梨の花も散らんとせん。此時に当り幸ひに桜の咲くあらばよし、唯四五の桜の画と只二三の桜の枯枝とが空しく文園に横たはらば、花を散せし咎^{とが}は何れの嵐の罪とせん。吾人は今の批評家の花に慈ならざるを怪しむ。

斯く長々しく弁じたる、頗る弁を好むに似たれど、吾人は唯標準を別にして諸家を評せんと思へばこそ、止むを得で此断をいひつるなれ。かかる差別の我文壇に現在せるを信ずればなり。西洋の差別を適用せるにては無し。詩を評するに抒情、叙事、ドラマの三質を別つ如く、小

説にも或別を立つることの甚だ用あるを感ずればなり。
たとへばドラマとしては上乘ならざるも叙事詩としては
上乘なることのあるが如く、叙事詩としては傑作ならざ
るも抒情歌として傑作なることのあるが如く、人間派人
情派の作としては甚だ妙ならずと見ゆる作も之を物語派
の作とすれば、甚だ妙なることのあるべければなり。此
別を非なりとする人あらん乎^か、其人は事物の平等を見て
差別を見ざる人なり、世に絶対あるを知りて相對あるを
知らざる人なり、一あるを知りて万億あるを知らざる人
なり、宇宙あるを知りて国家あるを知らざる人なり、国

家あるを知りて我あるを知らざる人なり、我あるを知らざるは死せるなり死灰なり。

此故に評者は「勝鬨」と「桂姫」とをもて物語派の作とし、「此ぬし」と「教師三昧」とをもて人情派の作とし、下に其然る所以を弁せん。敢て此四者の優劣を判ぜんとにはあらず、其その質の相異なれる所以を分析せんとす。是もまた評判の一種なるべし。但しかの三派の別は素より評者のほしいままにせる差別なり。幸ひに十中一の正しきを得ば、好弁の譏をまぬがるるに庶幾からん。

(明治二十三年十二月)

日本文学電子図書館

小説三派

著者：坪内逍遙

制作者：宮澤一郎

底本：現代日本文學大系 1

「政治小説・坪内逍遙・二葉亭四迷集」

筑摩書房

昭和46年2月5日 初版第一刷発行

日本文学電子図書館